

小園洋一作 小川政弘脚色 「絶望の淵から」

- 教師 …そこでだ、左辺の $y$ に $x$ を代入して整理すると、簡単な $x$ だけの二次方程式になるだろう。これをだ、こういうふうにして解くと、 $x$ が出てくるだろう。
- 小園洋一 あのう、先生…。
- 教師 なんだ小園。
- 洋一 すみません。さつきからちょっと頭が痛くて、吐き気がして…。
- 教師 しょうがないな。夜更かしでもしたんだろ。あとで習ったところはよく聞いとけよ。さもないとまた遅れるぞ。よし、保健室で休んどれ。
- 洋一(モノローグ) チェ、面白くもないあんな授業、だれが出てやっかよ。なんでこんな思いまでして勉強しなきゃいけないんだろ？ いっそのこと、何もかも忘れてどっか遠くへ行ってみたいなあ。
- 洋一ナレーション 僕は高校1年に入って間もなくだった。希望と期待に胸を膨らませて入った高校なのに、現実とは違っていた。クラス中のほとんどは、高校生になったばかりなのに、早くも3年後の大学受験を目指して、勉強に余念がないのだった。僕はそんなクラスの雰囲気、次第に溶け込めなくなっていく自分を感じていた。
- 母 洋一、お前、大丈夫なの？ このごろちっとも勉強しないじゃない。そんな列車の写真なんか撮ってばっかりいて。山田さんところでも、酒井さんところでも、塾に通い始めたんですってよ。しっかりしてくれなきゃ困るわよ。今週は？ そろそろ期末試験じゃないの？ 洋一、聞いてんの？ 洋…。
- 洋一 行ってきます。
- 効果音 (ドアの開閉音)
- 洋一(モノローグ)(エコー) あー、イヤだイヤだイヤだ！ 学校でも、家でも、「やれ勉強、進学、受験」。なんのための学校なんだ？ なんのための授業なんだ？ あんな目の色変えて机にかじりついて、一体何が得られると言うんだらう？ …やめた、今日は学校なんか行かない。
- 効果音 (街の雑踏)
- 洋一 あの一、ハイライトください。それとマッチ。
- 音楽 (ディスコ)
- 洋一 (マッチをつけ、タバコを吸う)(激しくむせる)
- 女の子 あんた、初めてなんでしょ、タバコ。およしなさい。それよか、踊りましょ。さあ。
- 音楽 (次第に高まり、カット)
- ナレーション 高校生活に甘い夢を見ていた僕は、思いもかけないことになった。自分がうたた寝している間に、周りが駆け足で進んでいって、一人だけ取り残され、気がついたら、片隅でひざを抱えてしょげ返っていた。
- 効果音 (学生たちのガヤ)
- A 優子、お前、すげえな。今度の試験、トップじゃねえか。
- 優子 ウフン、まあね。一度取ってみたかったの。だけどさあ、小園君、今回悪かったねえ。ピリから4番目まで落っこっちゃったわよ。
- B しょうがねえよ、あいつ。ぜーんぜんやる気ねえんだもん。
- ナレーション 僕の心の中の空洞は、日増しに大きくなっていった。勉強のむなしさを通り越して、生きるこ

との意味が、全く分からなくなっていたのだ。高校 1 年の秋。全然学校に行かなくなった僕は、10 月になって自分の手で退学届を出した。なんのためらいも、感傷もなかった。ただ、寒々とした思いが空っぽの心を吹き抜けていた。

効果音 (列車内)

洋一(モノローグ) また汽車に乗ってしまった。これで何度目だろう。フラッと汽車に乗って、知らない町で降りて、一日中さ迷い歩いて、僕はどこへ行くんだろう？ これから何をするっていうんだろう？ やめた、考えたって無駄だ。——海だ、海が見たい。

効果音 (潮騒)

洋一(モノローグ) この海をどこまでも泳いでいったら、どうなるだろう？ だれもいない遠い遠い沖に出て、真っ赤な夕日を見ながら、静かに静かに沈んでいったら…。

ナレーション “死”の影が、僕の心の中で見え隠れしながら、次第に大きくなっていった。そんなある日、僕は、聴くともなしに聴いていたラジオで、ある少女の話聞いた。

効果音 (ラジオのチューニング。)

少女(ラジオの声) (フィルター音) わたしは、盗みや恐喝などを繰り返し、どうしようもないほどの非行少女でした。でもわたしはイエス・キリストと出会い、キリストによって救われました。聖書を読みながら、わたしには以前とは違った全く新しい人生が始まりました。毎日が本当に感謝なんです。

洋一(モノローグ) (エコー) こんな生き方があったのか。もしこの人の言ってることが本当だとしたら、もしかしたら自分も、キリストを信じれば立ち直ることができるんじゃないか？

女性アナウンサー (FI) この番組を聴いて、ぜひあなたもお便りくださいませか？ あて先は…(FO)

ナレーション それはFEBCというキリスト教の福音番組だった。僕は心に強く引かれるものを感じた。“これを逃したら、僕にはもう何も残ってない”というような気持ちだった。僕はその夜、ペンをとって机に向かった。自分の悩み、寂しさ、苦しみ、思っていることを便せんに何枚も書き連ねた。そして、FEBCあてのその手紙を、僕は祈るような気持ちでポストに入れた。そして数日後——。

洋一(モノローグ) 僕に手紙？ ええと、FEBC…、あ、あれだ！(封を切り、便せんを取り出す音) (読む) 洋一君、長いお手紙拝見しました。(女性アナウンサーの声に) よく思い切って書いてくれましたね。何度も読みました。そしてあなたの気持ちが、手に取るように分かるような気がしました。苦しかったでしょうね。でも、この世のだれも君のことを分かってくれなくても、イエス様は違うんですよ。イエス様は…(FO)

ナレーション その手紙には、見ず知らずの僕に対して、本当に温かい慰めと励ましの言葉が、数枚の便せんにつづられていた。「イエス様は、あなたのことを愛してくださっています。」手紙の中にあつたこの言葉を、僕は繰り返し繰り返し読んだ。知らず知らずのうちに、涙がほほを伝わっていた。

音楽 (ブリッジ)

ナレーション 年が明けて、僕は初めて教会に行った。FEBCに勧められたのだった。初めての時はとても勇気が要った。

牧師 小園、洋一君ですね。よくいらっしやいました。

洋一 あ、ラジオでイエス様のことを聞いて、それで、もっと知りたいと思って…。

牧師 ああ、そう。それはすばらしい。そのラジオ放送こそ、イエス様が君を神様の世界に誘ってお

られる証拠ですね。これからもぜひ続けてきてくださいね！

ナレーション

2度、3度と教会に通い、放送を聴きながら、聖書を読んでいるうちに、僕の心の中で何かが起こっていた。空っぽだった心の中が、命の言葉で少しずつ満たされていくようだった。

洋一

(机で聖書を読む)「神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。…私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」(ヨハネの手紙第一 4:9-10)こんな、こんなバカな僕のためにイエス様は十字架にかかって死んでくださったのか…。そんな値打ちなんか、僕にはこれっぽちもないのに。自分中心のどうしようもない僕なのに。——イエス様、信じます。助けてください！

ナレーション

去年の5月28日、僕は罪の悔い改めと、イエス様を救い主と信じたことのあかしとして、バプテスマを受けた。

牧師

小園君、よかったね。本当によかった。もう君は以前の君じゃない。イエス様によって生まれ変わったんだ。しっかりやるんだよ。

洋一

はい！

ナレーション

それから間もなく、僕は改めて県立高校を受験して合格した。かつての僕を考えると夢のようだ。あの時、あのラジオを聴かなかっただら、と思うと、神様の不思議な導きに感謝のほかはない。神様に愛されているということがどんなにすばらしいか、僕はこの手で心に刻んでみたい気持ちでいっぱいだ——。

<完>